みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

名もなき花と千のハシーシュ (世界の食を言語する 中東・アフリカ編 11：アラビア語)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅瀬, 晶子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5243

11
アラビア語

名もなき花と千のハシーシュ

ホッベイゼの炒め物。左はマナイーシュ（マナキーシュ）と呼ばれる、ピッツァ状の東地中海の総菜パン

総合研究大学院大学
葉山高等研究センター・上級研究員
菅瀬 晶子
（すがせ あきこ）

Profile

1971年生まれ　東京都出身
専門分野●文化人類学、中東地域研究
著書●『「対テロ戦争」の時代の平和構築』（共著）、『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』、『新月の夜も十字架は輝く』（近刊）、他

二〇世紀初頭、女性の身でアラブ人キリスト教徒やドルーズの従者を伴い、エルサレムからトルコ南部を縦断する考古学調査の旅を決行した英国人ガートルード・ベルは、その旅行記『シリア縦断紀行』のなかで、こんなことを書きとめている。「アラビア語ではどんなに美しくても使いみちのない植物には名前がない。それは十把一からげで、ハシーシュつまり「草」に過ぎない」、と。その行間からはあきらかに、彼女の不満げな気配をかぎとることができる。

無理もない。ガートルードが旅をしたのは二月から三月、つまりかの地では雨季の終わりにあたり、さまざまな花ばなが野山を飾る、一年でもっとも自然の美を堪能できる季節だった。桜によく似たアーモンドや原種のクロッカス、スイセン、アネモネ、マツムシソウ。そのいずれもが色あざやかで薫り高く、この土地のことばではなんと呼ばれているのかと興味をそそられるのは、もっともなことである。ところが、庭園で丹精こめた大輪のバラも、野を匍（はらば）う花も木に咲く花も、アラビア語ではすべて花の総称である「ワルデ」と呼ばれる運命にある。ガートルードは「ハシーシュ」と書いているが、これは正確には花が咲いていない状態の草のことで、花が咲けばそれはどんなものでも「ワルデ」だ。感受性の強い女性であったガートルードにとって、そんな色とりどりの花たちがすべてハシーシュかワルデ、つまるところ名なしとして片付けられてしまうのは、なんとも味気なく思えたことであろう。

さて、ガートルードに「使いみちのない」草と、ばっさり切り捨てられたハシーシュ。勘のよい読者はすでにご

庭先で鉢植えにされたハシーシュ。長ネギ（バサル・アフダル）やホーリーバジル（ハバ）など

推察のとおり、この単語はハシシ、つまり大麻の語源にほかならない。人びとが声をひそめてハシーシュと言う場合、それはもちろん中東諸国でも禁止薬物である大麻や、そのほか麻薬全般をさしており、そこには暗い意味合いがこめられている。ところが実は、ハシーシュと呼ばれるのは使いみちのない雑草や、裏社会の代名詞たる大麻ばかりではないのだ。その証拠に、つましい生活を送る人びとは冗談まじりに、こんなことを言ったりする。「うちは貧乏だからね、羊を食べられるのはお祭りのときくらいさ。それ以外のときは、毎日ハシーシュばっかり食べてるよ！」 雑草はともかく、大麻も部位によっては食用になるのだが（麻の実は七味唐辛子の原料だ）、この場合のハシーシュがどちらでもないのはいうまでもない。

日常的に人の口にのぼるハシーシュとは、日本でいえばアシタバやスベリヒユなどのように、どこにでも生えているけれども実は食用になって、しかも美味で健康によいとされる草のことである。品種改良された野菜とは明確に区別され、農場で栽培されている場合もあるものの、多くの場合農家の庭先に生えていて、必要に応じてむしって料理するというのが一般的だ。雨季の間じゅう、市場には野趣豊かなさまざまな種類のハシーシュがあふれる。色こそどれも似たような緑色ではあるが、その形や種類は千差万別、地域色も豊かで日本では見かけないものも多く、辞書にこそ載ってはいないが、それぞれにちゃんと名前がある。炒め物の定番で、おそらくパン（ホブズ）によく似た円形の葉から名付けられたであろうホッベイゼ、大きな長い葉に米と挽肉を巻いて食べるサイネ、ころころと太った茎を生で囓（かじ）ると、口の中にほのかに甘味がひろがるショウマル（多年草フェンネル）などなど、フィールドワークに入ってはじめて知ったものばかりだ。また、現在も人気の高い民間療法で使われる薬草類も、総称してハシーシュと呼ばれることがある。つまり、ハシーシュは「使いみちのない」草などではまったくない。それどころか東地中海地域のアラブの農耕民たちにとって、ハシーシュは命の糧といっても過言ではないほどに、重要な存在なのだ。

一説には、あの「アラビアのロレンス」など足元にも及ばなかったといわれるほど、アラビア語やアラブ世界の事情に精通していたガートルード・ベル。そんな彼女がハシーシュについて詳しく言及しなかったのは、彼女が旅行の期間中、ほとんどベドウィンとばかり接していたことと無関係ではなかろう。ハシーシュを好んで食べるのは、ヨルダン川西岸地区やガリラヤ地方、レバノンなど、降水量が豊かで農耕のさかんな土地の農民たちであり、それはある意味、彼らの特権ですらある。雨とは縁遠い砂漠に生きるベドウィンたちにとって、ハシーシュは高嶺の花であり、彼らの生活にはかかわりのないものである。ベドウィンたちがラクダや羊、その産物である乳製品に対して、年齢や毛並み、形態ごとに細分化した名称を与えていることは有名であるが、ハシーシュの種類には無頓着であったに違いない。そうでなければ、本来ハシーシュが野山に生い茂る雨季に旅をしていながら、千も万もあるそれらの名前にガートルードが接しなかったということは、ありえないのだから。